万博の頃

理事　川﨑　清

大阪に万国博が開催されたのは1970年３月から９月にかけてのことであり、既に30年以上も前のことである。最近、EXPOタワーの取り壊しや国立国際美術館の移転が取りざたされ、久し振りの話題となった。考えてみると、私が京都大学の講師になって、フランスを中心に１年間あまりヨーロッパを見て回り、帰ってきたのが1960年の５月、それから間もなく、棚橋諒先生の計らいで建築研究協会に参画し、阪神浄水場、岡山県後楽園温室、斐川農協会館など、五里霧中の状態で設計を進めていた。当時棚橋先生は山陰の仕事が多く、よく先生のお伴で、設計の打合わせや現場をみてまわったが、周辺の温泉宿で一泊というゆとりのある時代であった。

万博の仕事が始まったのが1965年11月、会場の基本調査が京大に依頼された時からで、言わば、私が本格的に建築の設計に取りかかった初期の時代に、この調査から後の会場計画、さらに万博美術館の設計迄、都市的広がりから建築までの長い行程を経験できた事は幸せなことであった。

当初、この計画を土木、建築、都市計画などいずれの分野がイニシアチブをとってすすめるか、東と西の専門家をどう統合するかなど、方法論を廻る議論からはじまった。石原藤次郎先生、棚橋先生の明解な判断で、土木は会場周辺の近畿圏整備を主に、建築は会場内を主に、計画の前半は西山夘三先生、後半を丹下健三先生がまとめるということに落ち着いた。そして会場計画は西山、丹下の下に東西の13人の若手建築家等が集まり実際の作業を進めることになった。京大から上田篤、加藤邦男先生に私も加わった。石原、棚橋先生には万博協会の会場計画委員として大所高所からの御指導をいただいた。

こうして「進歩と調和」というメインテーマの下に、未来都市のモデルをつくる意気込みで、現在問題になっている水、エネルギーの循環利用、IT社会の先駆けとなる人工頭脳と称するコンピューターシステムによる会場運営、老若男女皆が楽しめるお祭り広場などを提案した。これらは全てうまくいった訳ではないが、未来都市のコンセプトを表現する試みに胸を踊らせた。万博に関った多く人々はその後の日本の発展に貢献する力量をつけ、社会的に活躍した。万国博の社会的意義は様々に取り沙汰されているが、私は人材を作ったことが一番評価されるべきである。「お祭りが終わって人が残った」それが私の評価である。そしてあの頃考えた循環型社会、IT化社会などが21世紀の中心課題になろうとは夢にも思わなかった。しかし、21世紀を作るのは我々の世代では無い。明るい未来都市を描きながらの発想ではあったが世相は暗く変わっている。社会変革のさらなる発想がこれからの若い人達に必要な様におもわれる。